

年 次 報 告

調 査

1 伎 楽 面

1) 南倉 1 伎楽面 木彫 第113号 (挿図26~31)

[法量] 縦25.4cm、横19.0cm、奥行19.8cm、重232.5g

[品質] キリ製、彩色

[形状] 師子児面または太孤児面。有髪の童子相。耳朵は長く平板状。閉口。

[構造・技法]

縦一材製。木心は頭頂やや右前寄りから下顎に通るが、顎部は虫喰のため大きく欠失している。頭頂部では木心が脱落し、貫通孔となる。瞳と鼻孔は貫通。面内部は外形に合わせて平滑に削り、両目と鼻部分はさらにわずかに削り込む。

彩色は顔面部全面(目、唇含む)に白色を塗り、瞼や頬に薄く赤色を量かす。頭髮は木地に直接黒漆を塗り、髪際ではその黒漆の上に肉身の白色が重なる。墨描きは一切見当たらない。

[紫外線(波長365nmを使用、以下同じ)蛍光] 白色部分が黄白色の蛍光を発する。

[X線回折・蛍光X線分析]

白色部分からはX線回折により方解石(Calcite)と石英(α -Quartz)が検出され、また蛍光X線分析による重元素(Ti以上)の測定ではSrが検出されている。白色顔料は炭酸カルシウムである。また、うっすらと赤い瞼の部分では蛍光X線分析によりSrのほか、わずかにPbが検出された。X線回折では方解石と石英に基づく回折線以外は見られなかったものの、この赤い顔料は鉛丹(四三酸化鉛)と推定できる。

[考察]

本伎楽面は『正倉院の伎楽面』で第5類とされ、また成瀬がW3式とした伎楽面である。本様式に属す伎楽面は顔面を炭酸カルシウムによる白色塗りとするのが特徴であるが、本面も同様であった。また顔面彩色に一部とは言え鉛丹が用いられていることが化学的に確認できたのは本様式の面でははじめてである。

[修補損傷等] 顎部および鼻先の欠失補修(平成10年度修理、本号年次報告「修理3 伎楽面」参照)。

[調査方法] 実体顕微鏡、紫外線蛍光、赤外線反射、X線透過、X線回折、蛍光X線分析。

(成瀬正和・西川明彦・三宅久雄)

2) 南倉1 伎楽面 乾漆 第7号 (挿図32~41)

[法量] 縦24.5cm、横18.7cm、奥行21.6cm、重271.0g

[品質] 乾漆製、彩色、貼毛

[形状] 師子児面または太孤児面。有髪の子相。開口。

[構造・技法]

麻布3枚(織り密度6×7本/cm)を麦漆で貼り重ねて成形し、表面に漆木屎を盛って整形している。目、鼻孔、口は貫通。両頬にくぼを窪ませる。頭頂に植物性繊維と思われるものを貼り、毛髪を表現しているが、ほとんど脱落している。

彩色は表面全面に白色の下地を施す。肉身部は残存部を見る限り、脛、頬、耳の内側などを薄く赤色を塗り、頭鉢には墨を塗る。目は輪郭に墨で括り線を入れ、瞳の孔周辺に墨を塗り、その外側に緑青を塗り、目尻に赤色を暈かす。唇は赤色塗り。歯列は墨描き。

[紫外線蛍光] 乾漆素地 - やや橙味帯びた茶色、白色 - 黄白色、貼毛 - 黄白色。

[X線回折・蛍光X線分析]

白色下地の部分はX線回折により方解石(Calcite)が検出され、また蛍光X線分析ではHg、Pb、Srが検出された。Hg、Pbは上層の赤色彩色層の影響と考えられる。白色彩色には炭酸カルシウムを用いていることが明らかとなった。顔面の耳などのうっすらとした赤色彩色の部分では、X線回折では赤色に由来する顕著な回折線は認められなかったが、蛍光X線分析によりHg、Pb、Srが検出され、赤色彩色に朱と鉛丹を併用していることが推定できる。また目の緑色彩色を中心とする部分では形状的な制約などから顕著な回折線は認められなかったが、蛍光X線分析ではHg、Pb、Sr、Cuが検出され、緑には岩緑青が使用されたことが推定できると同時に、この周囲では赤色彩色に鉛丹のみが用いられていることが明らかとなった。なおこの岩緑青はAsを伴わないタイプである。また唇の部分では蛍光X線分析によりHg、Pb、Srが検出され、またX線回折では形状的な制約はあったが、わずかに辰砂(Cinnabar)に基づく回折線が認められ、朱の使用が明らかとなった。

[考察]

本伎楽面は『正倉院の伎楽面』で第13類とされ、成瀬がD3式としたものにあたる。白色下地の部分に炭酸カルシウムが用いられていることが明らかとなった、これは本様式に属す伎楽面の特徴の一つである可能性が高い。なお炭酸カルシウムを用いる伎楽面は前述のW3式などを中心に木彫面では散見される。

[備考] 面内部の布目に白色の土が詰まっているが、乾漆成形時に用いた粘土製雄型の痕跡である可能性あり。

[修補損傷等] (平成10年度修理、本号年次報告「修理3 伎楽面」参照)

[調査方法] 実体顕微鏡、紫外線蛍光、赤外線反射、X線透過、X線回折、蛍光X線分析。

(成瀬正和・西川明彦・三宅久雄)

2 鏡

1) 南倉70 十二稜鏡 黄金瑠璃鈿背 第6号 (口絵6、挿図1)

[法量] 長径18.5cm、短径17.3cm、縁厚1.4cm、鈕高1.1cm、重さ2177g

[品質] 銀製鍛造、背面は金板および七宝焼の鍍金銀板貼り。

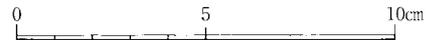
[形状] 十二稜形で鏡面は凸面を呈す。鏡背は七宝焼の宝相華を飾る。

[構造・技法]

鈕孔から内部をうかがうと、鈕が覆う鏡胎背面中央部の部分は断面が台形の凸部を成し、その凸部上面には轆轤痕と十二稜形を割り付けたと思われる刻線が見える(口絵7)。これらのことから、鏡胎は厚さ1cm以上の分厚い銀板を轆轤挽きして、中央部を挽き残した円い板を作ったのち、周縁を切って十二稜形に成形したものと推定できる。また、鏡胎と鈕は一体でないことが判る。



挿図1 南倉70 十二稜鏡 黄金瑠璃鈿背 第6号



鏡背を飾る宝相華の花弁は大花弁6枚、覗き花弁6枚、鈕の周縁の小花弁6枚をそれぞれ別々に作る。まず、厚さ0.7mm(計測可能部の最大値、0.1mm位に研ぎ減った箇所あり)の銀板を各花弁形に切って、花弁の付け根側を除く縁を折り曲げて、高さ2.5~3.5mmの立ち上りを作る。そして、その内部に厚さ0.8mm(計測可能部の最大値、0.1mm位に研ぎ減った箇所あり)、高さおよそ2mm位の帯状の薄い銀板を立てて、文様区(植線)を付ける。各区画内に黄、緑、濃緑色の七宝釉薬を焼き付け、銀の花弁と植線に鍍金を施す。なお、花弁の立ち上がりおよび植線に七宝釉薬が迫り上がった状況から(口絵9)、溶融ガラスの流し込みではなく、フリット(ガラス粉)を盛って焼成したものと考えられる。また、通常七宝は「裏引き」といい、金属と釉薬の膨張率の均整をはかり、七宝胎の変形を防ぐために裏面にも釉薬を施すが、本品は釉薬のひび割れの状態から(口絵8)「裏引き」していないものと思われる。鍍金はアマルガム法によると思われるが、水銀が蒸発する温度は七宝釉薬の融点より低く、おそらく各花弁製作の最終段階で鍍金を行ったものと思われる。

大花弁と覗き花弁の間に見える三角形の霰文金板は1枚の金板に裏から石目鑿で粒を打ち出し、表から魚々子鑿で打って粒の裾を絞め、その後三角形に切断しているものと思われる(口絵10・11)。

以上に述べた七宝の花弁と霰文金板は木屎漆様のもので鏡の背面側に接着している。

花芯に見立てた鈕は厚さ約1.2mm(鈕孔小口)の銀板を打ち出して、中空の半球形にし、表面

に花卉と同じように植線をして七宝釉薬を裏引きをせずに施している。しかし、この鈕をどのような方法で鏡胎に取り付けているかについては、X線透過写真を撮影しても判明しなかった。

鏡の側面に銀製鍍金の帯が約2mm幅で十二稜形に沿って巡っているが、その構造についても判らなかつた。

[紫外線蛍光] 各花卉の接着剤 - やや橙色の蛍光、黄色釉(大花卉、小花卉) - 黄色、黄色釉(覗き花卉、鈕) - 無し、霰文金板 - 橙味帯びた黄色

[蛍光X線分析]

測定にはX線回折装置に付属するエネルギー分散方式の蛍光X線分析装置を用いた。

鏡胎の部分は多量のAgと2%程度のCuが検出され、わずかにCuを含む銀であることが確認できた。縁の金板では多量のAuと少量のAgが検出され、わずかに銀を含む金であることが確認できた。植線の部分では周囲の七宝釉に由来する元素の他に、Auと少量のAg、微量のHgなどが検出された。銀台にアマルガム法による金鍍金が施されたものであろう。

黄色釉の部分ではFeと多量のPbが、濃緑色釉および緑色釉の部分ではCuとFeおよび多量のPbが検出された。Cuの含有量は濃緑色釉の部分が緑色釉の部分に比べ相対的に高い。以上から黄色釉は鉄を着色材とする鉛ガラス、濃緑色釉、緑色釉はそれぞれ銅を着色材とする鉛ガラスであることを確認した。

[考察]

鈕の構造

鏡として使用する際、鈕孔に紐を通して手に持つが、そのため、鈕は2kg以上ある鏡の重さを支える強度が必要となる。この時代にネジ留め式は考え難く、鑢付けあるいは漆による接着では弱いので、鈕の下方小口に脚(太柄)を造り出して差すか、鋳を打つかして、取り付ける方法が考えられる。鏡胎中央の凸部は厚さ6~7mm程あり、そこへ向けて鋳などを打つことは可能である。しかし、その凸部周縁付近の鏡胎の厚さは、おそらく5mmに満たないものと思われる。鈕の裾をわずかに外側に広げた貼り代、つまり鈕に狭い鑢を付けて、その鑢の上から鋳を打った場合、鋳をあまり深く差し入れられないので、鈕の強度が得られない可能性がある。

なお、鈕頂部の釉薬脱落箇所は植線をして施釉した可能性もあるが、半球形の金属胎に施釉した場合、現状のようなひび割れが入り易く、この部分の植線の有無は不明である。

側面の銀製鍍金帯の構造

花卉に用いた厚さ1mmに満たないような薄い銀板では、宝物に見られるように鏡胎と完全に一致、密着させることは困難と思われる。帯はある程度の厚みがあるものと思われる(口絵12)。

そもそも、この帯は花卉の接着痕を隠すため、かつ意匠的な意味も持つとされる。しかし、そのために高さ約2mmで、ある程度分厚い、いわば十二稜形の銀製の枠を作り、その枠自体をわざわざ取り付けなければならず、不自然な感は否めない。たとえば、この帯を別に作らなくても接着痕を見せないように加工できたであろうし、意匠としても、鏡胎自体に2mm幅で鍍金すれば事済む。ちなみに花卉の胎とこの帯の間には漆様の接着剤が窺えるが、帯と鏡胎の間に

はわずかに隙間がある部分でも接着剤など確認できず、薄い紙が2mm以上奥へ差し込める(口絵13)。したがって、この帯枠は鈕と同様に脚を造り出すか鉸留めによったか、あるいは鈕のように強度が要求されないので、鑑付けをして取り付けられている可能性も考えられる。

七宝釉薬

とくに黄色釉は釉薬成分が未溶解のままの不透明なもので(口絵8)。また鈕部分にはそのため脱泡不十分な箇所も見られる(口絵14)。これと同じ様にガラス質が未溶解のものが中倉193瑠璃玉原料および中倉207破玉といった正倉院に伝わるガラスの製品材料などに見受けられる。このことは当時のガラス製作技術が未熟であったことに因るものと思われる。

接着剤

花卉や霰文金板を貼った接着剤は肉眼観察では他の宝物に見られる木屎漆に質感等似ている。しかし、七宝釉薬の上に相当はみ出して塗られており、製作時にそのままでは黒く目立つので、木屎表面を研磨するなどして黒い色調を抑えた可能性がある(口絵15)。また、接着剤に紫外線を照射するとわずかに蛍光色があり、木屎の成分による反応も考えられるが、あるいは塗った時には透明感のある、漆以外の接着剤を用いた可能性も否定できない。なお、宝物の釉薬破損部とくに鈕の黄色釉は脱落したものを接着復元しているが、その接着剤は鏡胎に花卉の七宝板を貼っているものと同様の色を呈している(口絵14)。また、他にも鈕座の周辺の七宝板にもひび割れを修補したような痕跡があり、いずれも製作時に補修したものと考えられる。

[備考]

霰文金板には色調が他と異なり、霰文の打ち方に破綻が見られるものがあり、『旧御物目録(明治17年に校正)』の本品の記述に「純金三角形の板三枚欠失す」とある。ただし、明治5年の『壬申検査社寺宝物図集』に見える本品の拓本には霰文金板は全て揃う。

現在、本鏡の納箱に充てられている漆皮箱は本来のものではなく、南倉71漆皮八角鏡箱第4号が本来の納箱である可能性がある(『正倉院紀要』22 木村法光「壬申検査社寺宝物図集と正倉院宝物」参照)。また、『八重の残花』(蜷川式胤著)に添付されている壬申検査の際に横山松三郎が撮影した写真を見ても、本鏡を南倉71漆皮八角鏡箱第4号と思しきものに納めたまま写されていることも付記しておく。

『書陵部紀要』5「正倉院御物金工品の調査報告」において、「鏡胎を錫アマルガムでメッキしている」とあるが、そのような事実はない。また、「側面の帯は厚さ0.5mmの金の薄板とし、漆によって接着されている」とあるが、今回それを確認できる事実はなかった。

[修補損傷等] 鈕頂部の釉薬脱落し、銀の七宝胎が露出している(口絵16)。片側の鈕孔の釉薬も流れ落ち、銀の七宝胎が露出している(口絵17)。鈕側面の黄色釉脱落箇所や鈕座周辺の七宝板のひび割れを接着補修している(口絵14)。

[調査方法] 実測図、実体顕微鏡、紫外線蛍光、赤外線反射、X線透過、蛍光X線分析。

(西川明彦・三宅久雄・成瀬正和)

2) 南倉70 円鏡 鳥獸花背 第9号 (挿図2)

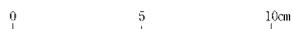
[法量] 径29.7cm、縁厚2.0cm、重さ5009.0g

[品質] 青銅(主成分は銅、錫、鉛)製鑄造

[形状] 円形で鏡面は凸面を呈す。鏡背に鑄出された文様は高肉のいわゆる海獸葡萄文で、中央に溝を刻んだ凸界圈線で内外区に分け、内区には獅子形鈕を中心に様々な姿態の親子の獅子を葡萄唐草地に配す。外区は葡萄唐草を巡らせ、各種の鳥獸を一對ずつ回旋的に表す。



挿図2 南倉70 円鏡 鳥獸花背 第9号



[構造・技法]

硬質陰刻型材に蠟を埋めて型抜きし、それを組み合わせて蠟型原型を作り、それに鑄物土を掛けて鑄型を製作したと考えられている。蠟型原形使用の根拠に指摘される、原型を貼り合わせた際に生じた段違いの痕「ハグミ」が確認できる(挿図3)。



挿図3 南倉70 円鏡 鳥獸花背 第9号 部分(×3)

[蛍光X線分析] Cu(67%)、Sn(27%)、Pb(6%)を主成分とし、このほかFe、Co、Ni、Zn、As、Agなどを含む青銅であることが明らかとなった。

[備考] 千葉県香取神宮に同型鏡あり。

[調査方法] 実測図、実体顕微鏡、蛍光X線分析。(成瀬正和・西川明彦・三宅久雄)

3 綾

平成11、12年度に正倉院の綾の組織や技法に関する調査を行ったので、結果を報告する。今回調査した内容は以下の通りである。

[法量]

文 丈：1つの完全な文様の経糸方向の長さ。古代の紋織物では繰り返される同じ文様の文丈が一定していないので、ここでは一部分の測定値を示した。

窠 間 幅：1つの完全な文様の緯糸方向の長さ。紋織物の1幅間に並ぶ完全文様の数は窠間数である。文丈同様ここでは一部分の測定値を示した。

[織の構成](綾調査結果一覧表を参照)

組 織：調査した綾は、平地四枚綾文綾、綾地異方四枚綾文綾、三枚綾地同方六枚綾文綾、

三枚綾地浮文綾で、一覧表に示した。正倉院の綾には、他に平地浮文綾、平地変わり（六枚）綾文綾の存在が知られる。

糸 幅：糸の太さは織物を分解せずに知ることが困難であるので、仮のものとして裂地表面の糸幅を測定した。

撚 り：糸の撚りの有無及び撚り数。

糸の種類：綾は後染め織物と考えられている。そのため糸全体（すなわち織物全体）の平均的な見た目の色を記した。今回調査した綾の織糸は全て絹であるので、素材については特に記していない。

把 釣：織文様は、曲線や斜線を経糸と緯糸とが直角に交差するギザギザの階段状の刻み目で表されている。この刻み目の横方向の最小単位数（経糸の把釣）と縦方向の最小単位数（緯糸の把釣）とを記した。

織 密 度：1センチあたりの経糸と緯糸の本数。

上記の糸幅、織密度とも最小目盛0.1mmのマイクロメーター付の小型単眼顕微鏡を用いて測定した。数値は、5～10ヶ所の平均値としたが、数値のばらつきが大きい場合には、例えば「16～18」などと記した。

[備考] 主として、対象宝物の現状や保存状態など。

なお、本報告の調査内容や報告の仕方は、前回の錦調査報告（正倉院紀要22号参照）と同様、今後一層の検討を重ねることとしたい。ちなみに、綾の製織方法をより詳しく知るためには、糸の太さの乱れ、織り間違い、文様の縦（経糸方向）・横（幅方向）方向の対称性、把釣の変化、精練の程度や劣化・朽損の程度、その他の様々な事柄の調査が必要であろう。また、織物の組織や製織の要領を示す組織要領図や紋意匠図（意匠図・組織図・指図）の類は、織組織について知るために有効であり、立体的な組織をどのように図示するか検討中である。

1) 北倉1 御袈裟幞袷 第1号（小花文縹綾）(挿図4)

[法量] 文丈は、1.2～1.5cm。窠間幅は、織り幅1幅中に小花文様が少しずつ変化しているので、織り幅全体である。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が右流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

国家珍宝帳に「碧綾幞」と記されている。これまで修理は行われていないが、端部に筋切れや破れ目が僅かに存在する。



挿図4 小花文縹綾 経

2) 北倉1 御袈裟幘袷 第3号(小花文縹綾)

(挿図5)

[法量] 文丈は、約15cm。窠間幅は、織り幅1幅中に小花文様が少しずつ変化しているので、織り幅全体である。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が右流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

No.1と同様に、国家珍宝帳に「碧綾幘」と記されている。ただし、文様は異なる。ちなみに、伝存する3条の中で、1号と2号は類似した文様であるが、3号だけが異なっている。



挿図5 小花文縹綾 経

3) 北倉42 円鏡 第6号の漆皮箱付属襦

(八稜唐花文赤綾)(挿図6)

[法量] 文丈は、16.8cm。窠間幅は、織り幅1幅中に主文と副文とが何回繰り返されているかわからないため、不明である。

[織の構成] 文様は、経地合で斜文線が左流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

国家珍宝帳に「緋綾嚙」と記されている。現在第6号鏡の箱とされているが、実際には第5号鏡の箱であると推定されているものの襦である。この襦は、平成3年度に修理された。なお、献納宝物の鏡箱の襦は、全て類似した平地四枚綾の八稜唐花文赤綾である。

文様の細部が明瞭に織り表されていないのは、18)の備考で述べるように、単に平地綾であるからではなく、別に原因があると考えられる(例えば、経糸を間違えて紋綜統に通しているとか、空引機の紋揚げの間違いなど色々なことが考えられる)。



挿図6 八稜唐花文赤綾 経



挿図7 花樹双鳳双羊文白綾 経

4) 北倉182 東大寺屏風裂 第68号 (花樹双鳳双羊文白綾)(挿図7)

[法量] 文丈は、21cm。窠間幅は、織り幅1幅中に文様が何回繰り返されているかわからないため、不明である。

[織の構成] 地部は、経地合で斜文線が左流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

円形に裁断された裂地で、用途は不明。裏に和紙を貼って箆笥に納められている。東大寺屏風に貼付されていたものを、屏風の破損が進んだため、昭和26~29年に剥がして整理したものである。

緯糸は白茶、経糸はやや濃い黄茶にみえる。それらは同系色であるから、糸の太さなどの違いにより反射光の色が異なっているのに過ぎないかもしれないが、照射する光の方向を色々変えても経糸の方が濃い色をしていた。したがって、当初から経緯の染め色が異なる二色綾の可能性もあるといえよう。



挿図8 葡萄唐草文緑綾 経

5) 中倉177 黄楊木几 第1号 付属褥

(葡萄唐草文緑綾)(挿図8)

[法量] 文丈は、約50cm。窠間幅は、織り幅1幅中の葡萄唐草文様が少しずつ変化しているので、織り幅全体である。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が右流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

この褥は、昭和の初期に完全に分解して修理されている。しかし、今では鏡面の緑綾は裂地が薄くなり破れそうに弱ってみえる。

経糸の中の数本は、黄色のまま残っており、黄色に染めてから藍染めしたことがわかる。



挿図9 双鳥唐花文白綾 経

6) 中倉177 粉地彩絵几 第10号 付属褥

(双鳥唐花文白綾)(挿図9)

[法量] 文丈は、約15cm。窠間幅は、織り幅1幅中に主文と副文とが何回繰り返されているかわからないため、不明である。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が右流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

この褥は、昭和の初期に完全に分解して修理されている。鏡面の白綾は半分近く欠落しているが、残った部分を平絹で裏打ちして欠失部を補っている。そのため、織り糸が糊で貼り付けられて平たく固い印象である。

7) 中倉177 彩絵長花形几 第18号 付属褥

(天馬文白綾)(挿図10)

[法量] 文丈は、約33cm。窠間幅は、約28cm(織り幅の半分)。

[織の構成] 文様は、経地合で斜文線が左流れ(地部は、緯地合)。他の綾と表裏の使い方が逆さである。その他、一覧表参照。

[備考]

この褥は、昭和の初期に完全に分解して修理されている。鏡面の白綾は四分の一程が欠落しているが、残った部分を平絹で裏打ちして欠失部を補っているので、織り糸が糊で貼り付けられて平たく固い印象である。

8) 中倉202 第89号櫃出櫃 古屏風装 第14号 6扇

(小唐花文緑綾)(挿図11)

[法量] 文丈は、約9cm。窠間幅は、織り幅1幅中に主文と副文とが何回繰り返されているかわからないため、不明である。

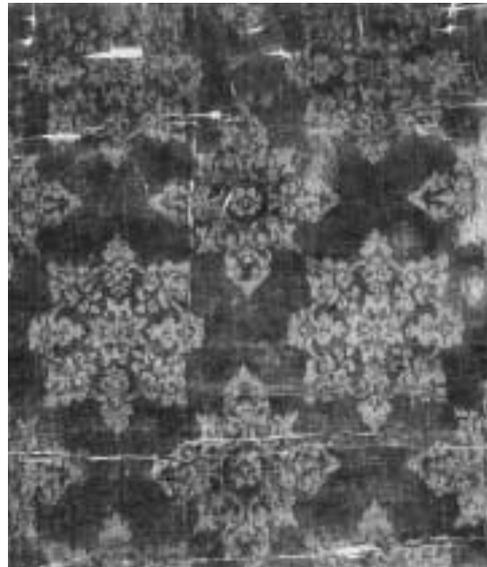
[織の構成] 屏風に貼付された面の文様は、経地合で斜文線が左流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

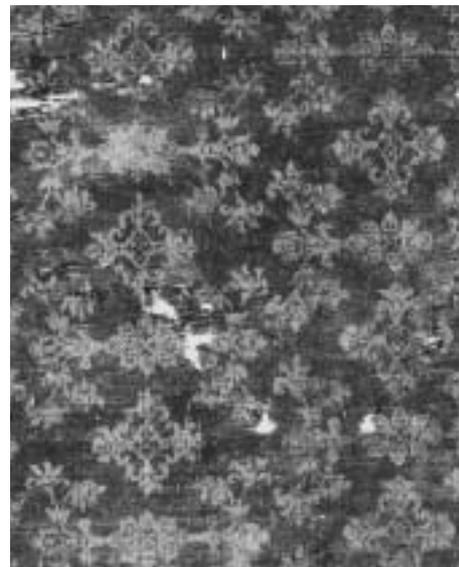
屏風の扇面に貼付された裂地片である。用途不明。表面文様部分の経糸は、拡大してみると1本1本が左右に蛇行して、ねじ曲がっている。これが製織の時に出来た織りの癖なのか、貼付したためなのか不明である。



挿図10 天馬文白綾 経



挿図11 小唐花文緑綾 経



挿図12 花枝唐草文紺綾 経

9) 中倉202 第89号櫃出櫃 古屏風装 第18号 1 扇 (花枝唐草文紺綾)(挿図12)

[法量] 文丈は、8.5cm。窠間幅は、織り幅 1 幅中に主文と副文とが何回繰り返されているかわからないため、不明である。

[織の構成] 屏風に貼付された面の文様は、経地合で斜文線が左流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

屏風の扇面に貼付された裂地片である。用途不明。糸目を揃えて強い糊で貼付されていて、平たく固い印象である。

10) 中倉202 第90号櫃出櫃 古屏風装 第19号 4 扇

(飛仙雲丸文茶綾)(挿図13)

[法量] 文丈は、約40cm。窠間幅は、織り幅 1 幅中に主文と副文とが何回繰り返されているかわからないため、不明である。

[織の構成] 屏風に貼付された面の文様は、緯地合で斜文線が右流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

屏風の扇面に貼付された裂地片である。両縁を数ミリ折り返して縫い綴じている類似した裂地が 3 枚貼付されている。うち 1 片の下端が剣先形で 3 方に糸房を付けているから、これらは幡脚の一部と考えられる。

11) 中倉202 第90号櫃出櫃 新造屏風装 第191号

(獅子雲花鳥文紫綾)(挿図14)

[法量] 文丈は、約19cm。窠間幅は、文様が中央線を境に左右対称になっていないので(細部に形状の違いがある) 織り幅全体が 1 窠間と考えられる。

[織の構成] 屏風に貼付された面の文様は、緯地合で斜文線が右流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

屏風の扇面に貼付された裂地片である。用途不明。織り幅を 1 尺 9 寸とすると、一端に織り耳を残すので、文様全体の様子が推定できる。



挿図13 飛仙雲丸文茶綾 経



挿図14 獅子雲花鳥文紫綾 経

12) 南倉148 錦綾絹紵布類及雑裂 第64号 函装
第10号 第1層内(双鳥唐花文紫綾) (挿図15)

[法量] 文丈は、16.5cm。窠間幅は、約16.5cm。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が右流れ。

その他、一覧表参照。

[備考]

真っ直ぐに伸展してから折り返して、筆笥の引き出しに納めてある。かなり破損が進んでいて、薄和紙を破れ目の形に合わせて切ったもので裏打ち修理が行われている。



挿図15 双鳥唐花文紫綾 経

13) 南倉150 白綾几褥 第19号(葡萄唐草文白綾)
(挿図16)

[法量] 文丈は、約27.5cm。窠間幅は、文様が中央線を境に左右対称になっていないので(細部に形状の違いがある)、織り幅全体が1窠間と考えられる。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が右流れ。

その他、一覧表参照。

[備考]

几褥の鏡面に用いられている。几褥は昭和53年に修理されたもので、綾の筋切れや破れ目が裏から和紙をあてて補修されているが、全体に練り絹の柔らかさを保っている。



挿図16 葡萄唐草文白綾 経

14) 南倉150 白綾几褥 第21号(小唐花文白綾)
(挿図17)

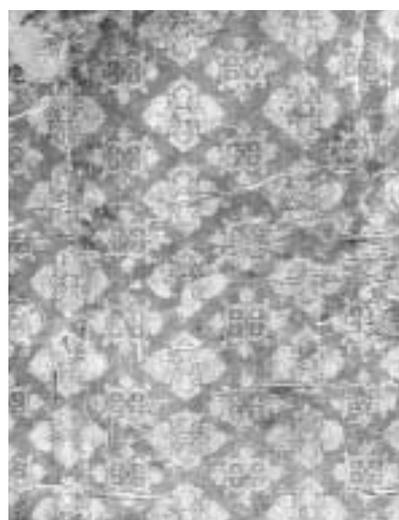
[法量] 文丈は、約5.2cm。窠間幅は、文様が中央線を境に左右対称になっていない(細部に形状の違いがある)ので、織り幅全体が1窠間であろう。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が右流れ。

その他、一覧表参照。

[備考]

几褥の鏡面に用いられている。几褥は昭和57年に修理されたもので、綾は破損が進行しており、



挿図17 小唐花文白綾 経

鏡面の約半分が欠失しているため、裏から薄和紙を当てて全面に裏打ちして補っている。やや平たく固い印象である。

15) 南倉150 白綾几褥 第23号 (花鳥蝶文白綾)

(挿図18)

[法量] 文丈は、約4cm。窠間幅は、文様が中央線を境に左右対称になっていない(細部に形状の違いがある)ので、織り幅全体が1窠間であろう。

[織の構成] 文様は、経地合で斜文線が左流れ。他の綾と表裏の使い方が逆さである。その他、一覧表参照。

[備考]

几褥の鏡面に用いられている。几褥は昭和55年に修理されたもので、綾の表面に筋切れが多く、裏から薄和紙を当てて全面に裏打ちされている。

16) 南倉150 綾錦几褥 第30号

(花樹獅子人物文白茶綾)(挿図19)

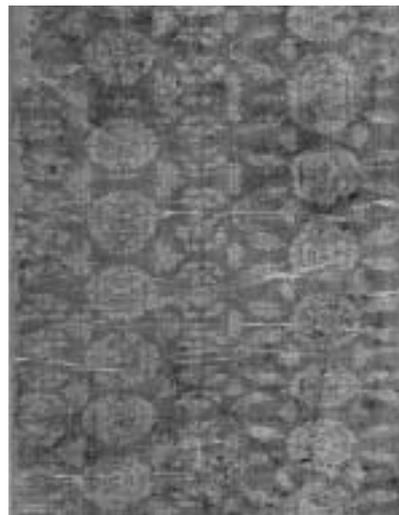
[法量] 文丈は、約44cm。窠間幅は、文様が中央線を境に左右対称になっていない(細部に形状の違いがある)ので、織り幅全体が1窠間であろう。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が左流れ。他の綾と綾流れの方向が逆さである。その他、一覧表参照。

[備考]

几褥の表面に用いられている。几褥は昭和の初期に修理されたもので、綾の筋切れや破れ目が裏から和紙を当てて補修されている。

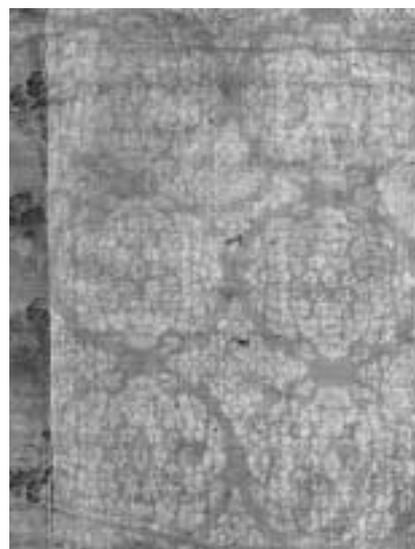
この褥に用いられている綾は、文様が上下の向きを変えずに経糸方向に順に並んでいるが、類似した綾を用いた几褥が別にもう1張存在し、その褥の綾は、ほぼ中央で文様の上下が逆さに打ち返されている。ただし、これら2張の褥だけでは、一定方向の文様が幾つ並んでから上下の向きが逆転するのか不明であり、並び方に規則性があるかどうかもわからない。



挿図18 花鳥蝶文白綾 経



挿図19 花樹獅子人物文白茶綾 経



挿図20 唐花蝶文白綾 経

17) 南倉150 白綾褥 第56号其2 (唐花蝶文白綾)(挿図20)

[法量] 文丈は、約27cm。窠間幅は、織り幅1幅中に主文と副文とが何回繰り返されているのかわからないため、不明である。

[織の構成] 文様は、緯地合で斜文線が右流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

座具として用いられた褥の鏡面の綾である。裏面の端に「講座」と墨書があり、法会で講師を務める僧が用いたものと考えられる。褥は昭和15年に完全に分解して修理され、平絹で全体を裏打ちしてある。なお、縁の夾纈繩は破損して欠失した部分が多いが、綾は汚れているだけでほぼ完存している。

18) 南倉179 綾羅錦繡雑張 第14号 古屏風装 第55号
第1扇(双竜連珠円文紫綾)(挿図21)

[法量] 文丈は、20cm。窠間幅は、織り幅1幅中に主文と副文とが何回繰り返されているのかわからないため、不明である。

[織の構成] 屏風に貼付された面の文様は、経地合で斜文線が左流れ。その他、一覧表参照。

[備考]

屏風の扇面に貼付された裂地片である。用途不明。平地綾であるが、No.3 八稜唐花文赤綾と比較すると、文様の細部が明瞭に織り出されている印象を受ける。また、No.8 小唐花文緑綾、No.9 花枝唐草文紺綾なども、平地綾であっても文様の細部が明瞭に織り出されているので、平地綾の文様が不明瞭になるとは限らないことが知られる。



挿図21 双竜連珠円文紫綾 経

(尾形充彦)

表1 綾調査結果一覧

No.・名称	組織	糸幅 (mm)	撚り	色	把釣	密度 (本/cm)
No.1 小花文縹綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.2 緯:0.25~0.35	無	縹	経:4 緯:4	経:44~48 緯:38~40
No.2 小花文縹綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.2 緯:0.25~0.30	無	縹	経:4 緯:4	経:44~46 緯:34~36
No.3 八綾唐花文赤綾	平地四枚綾文綾	経:0.15~0.20 緯:0.35	無	赤	経:2 緯:2	経:45~50 緯:28~32
No.4 花樹双鳳双羊文白 綾	三枚綾地浮文綾	経:0.10~0.25 緯:0.40~0.45	無	経:黄茶 緯:白茶	経:2 緯:2	経:42~44 緯:22~24
No.5 葡萄唐草文緑綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.10~0.2 緯:0.25~0.3	無	濃緑	経:4 緯:4	経:50~54 緯:40~42
No.6 双鳥唐花文白綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.25 緯:0.45~0.5	無	黄土	経:4 緯:4	経:44~46 緯:18~20
No.7 天馬文白綾	綾地同方綾文綾 (6・3)	経:0.15~0.35 緯:0.35	無	黄土	経:2 緯:2	経:44~48 緯:32~34
No.8 小唐花文緑綾	平地四枚綾文綾	経:0.1~0.2 緯:0.2	無	青緑	経:2 緯:2	経:52~54 緯:32~34
No.9 花枝唐草文紺綾	平地四枚綾文綾	経:0.15~0.25 緯:0.30~0.35	無	濃青緑	経:2 緯:2	経:52~56 緯:28~32
No.10 飛仙雲丸文茶綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.10~0.15 緯:0.25~0.30	無	薄茶	経:4 緯:4	経:44~48 緯:30~32
No.11 獅子雲花鳥文紫綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.05~0.10 緯:0.2	無	濃紫	経:4 緯:4	経:50~54 緯:34~36
No.12 双鳥唐花文紫綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.10~0.15 緯:0.25	無	紫	経:4 緯:4	経:56~58 緯:28~30
No.13 葡萄唐草文白綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.2 緯:0.35~0.45	無	黄土	経:4 緯:4	経:50~52 緯:28~30
No.14 小唐花文白綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.15~0.20 緯:0.25	無	白茶	経:4 緯:4	経:50~55 緯:30~32
No.15 花鳥蝶文白綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.15~0.20 緯:0.35	無	白茶	経:4 緯:4	経:50~52 緯:44~46
No.16 花樹獅子人物文白 茶綾	綾地同方綾文綾 (6・3)	経:0.15~0.20 緯:0.25	経強撚 (左右 混在)	経:白茶 緯:赤茶	経:2 緯:2	経:44~46 緯:28~30(地) 緯:34~36(文)
No.17 唐花蝶文白綾	綾地異方四枚綾 文綾	経:0.25 緯:0.45~0.5	無	薄茶	経:4 緯:4	経:40~42 緯:18~24
No.18 双竜連珠円文紫綾	平地四枚綾文綾	経:0.20~0.25 緯:0.3	無	紫	経:2 緯:2	経:50~52 緯:24~26

No.7、16の(6・3)は、文が6枚綾、地が3枚綾の意味。 No.16の経糸は撚りは、約900回/m。

4 聖語蔵経卷

平成11年度における聖語蔵経卷の調査は、前年度に引き続き、乙種写経第199号高僧伝卷1乙から第203号十住毘婆沙論卷1までの計20巻について実施した。

1) 乙種写経 第199号 高僧伝

前年度未報告の巻1甲についても併せて述べる。本号には、次の2種の経卷が混淆している。

a) 「高僧伝」。梁慧皎撰。13巻。『大正新脩大蔵経』No.2059。

乙写199号では、巻1(乙)・2・3・4・5・6・7・8・9・10(甲)・11・12・13・序録(数目不明)の全14巻一具。

[法量] 各巻の料紙は、基本となるものに限っても、複数種の規格が混在する場合が多い。縦25.4~25.8cm、界高19.3~19.6cm、界幅1.8~2.0cm。1行17字は全巻ほぼ共通である。

巻1：全長1150cm。横48cm、1紙25行。巻2：全長1145cm。横53.2/48cm、1紙28/25行。巻3：全長1337cm。横54.8/48cm、1紙29/25行。巻4：全長657.5cm。横49.6cm、1紙26行。巻5：全長1071cm。横55.2cm、1紙29行。巻6：全長1387cm。横53.2/51.5cm、1紙28/27行。巻7：全長1466cm。横54.8/51.8/48cm、1紙29/27/25行。巻8：全長1127cm。横55.1/51.7cm、1紙29/27行。巻9：全長801.4cm。横51.5cm、1紙28行。巻10：全長1048cm。横49.7cm、1紙26~27行。巻11：全長1180.8cm。横51.4cm、1紙27行。巻12：全長791.6cm。横48cm、1紙25行。巻13：全長1339cm。横53.5cm、1紙28行。序録：全長546cm。横48cm、1紙25行。

[品質形状] すべて紙本墨書。卷子装。本紙は白楮紙。巻5・11・13以外は淡褐色紙、雲母散らしの原標紙が残る。巻8・10・13・序録の新補軸以外は黒漆塗朱頂割軸。

巻1：本紙27張。巻2：本紙26張。巻3：本紙27張。巻4：本紙16張。巻5：本紙24張。巻6：本紙32張。巻7：本紙32張。巻8：本紙23張。巻9：本紙18張。巻10：本紙24張。巻11：本紙24張。巻12：本紙17張。巻13：本紙26張。序録：本紙13張。

各巻紙背には、墨梵字丸印があり、巻3後半、巻6・巻7の中程では、これに代わって墨宝塔印が捺される。

[備考] 外題・内題・尾題とも「高僧伝巻第…」の形式で共通。筆跡は各巻で不同。巻首におかれた目録部分付近と、巻末尾題付近で別紙の切り継ぎが見られる巻が多い。巻3軸付部分に「嘉応元年⁽¹¹⁶⁹⁾九月五日於法性寺書之」の奥書が残り、院政期の書写であることが分かる。

b) 「続高僧伝」。唐道宣撰。30巻。『大正新脩大蔵経』No.2060。

乙写199号では、巻1(甲)・10(乙)・16の3巻を存するのみ。

[法量]

巻1：縦26.6cm、横54cm前後(完全1紙)。全長1124cm。界高20.1cm、界幅1.8cm。1行17字、1紙に30~31行。

卷10：縦26.6cm、横54.3/53cm（完全1紙）、全長1062cm。界高20.2cm、界幅1.8cm。1行17字、1紙に31/30行。

卷16：縦26.6cm、横52.4cm（完全1紙）、全長1384cm。界高20.0cm、界幅1.9cm。1行17字、1紙に30～31行。

[品質形状] すべて紙本墨書。卷子装。本紙は白楮紙。淡褐色紙、雲母散らしの原標紙が残る。黒漆塗朱頂割軸。卷1：本紙21張。卷10：本紙20張。卷16：本紙27張。各巻紙背には墨宝塔印が捺される。

[備考] 外題・内題・尾題とも「続高僧伝巻第...」の形式で共通。筆跡は各巻で不同。体裁・筆跡・紙背の印などは、a)高僧伝と共通する要素がある。目録・尾題付近での料紙の切り継ぎは見られない。

2) 乙種写経 第200号 大孔雀明王経 巻中

[法量] 縦26.1cm、横53.5cm（完全1紙）、全長1088cm。界高19.6cm、界幅1.8cm。1行17字、1紙に29行。

[品質形状] 紙本墨書。卷子装。本紙は白楮紙21張。淡褐色紙標。黒漆塗朱頂割軸。

[備考] 内題「^(孔脱)仏母大雀明王経巻中 / 特進試鴻臚卿大興善寺三蔵沙門大広智不空奉 詔訳」。外題・尾題「大孔雀明王経巻中」。尾題次行に「一校了」、第20紙裏に「二校畢」の墨書あり。

3) 乙種写経 第201号 大丈夫論 巻下

[法量] 縦25.9cm、横46.6cm（完全1紙）、全長864cm。界高19.8cm、界幅1.9cm。1行17字、1紙に26行。

[品質形状] 紙本墨書。卷子装。本紙は黄楮紙19張。淡褐色紙標。黒漆塗細手棒軸。

[備考] 内題「大丈夫論発菩提心品第十五 巻下」。

4) 乙種写経 第202号 菩提資糧論 巻3

[法量] 縦25.5cm、横53.6cm（完全1紙）、全長501cm。界高20.0cm、界幅1.8cm。1行17字、1紙に29行。

[品質形状] 紙本墨書。卷子装。本紙は白楮紙10張。褐色紙標。黒漆塗朱頂割軸。

[備考] 内題「菩提資糧論巻第三」。

5) 乙種写経 第203号 十住毗婆沙論 巻1

[法量]

縦26.8cm、横50.5cm（完全1紙）、全長1457cm。界高19.8cm、界幅2.2cm。1紙に23行、1行17字。

[品質形状] 紙本墨書。卷子装。本紙は淡褐色楮紙29張。淡褐色紙標。黒漆塗細手棒軸。

[備考]

内題「十住毗婆沙論序品第一 龍樹菩薩造」。淡褐色旧標紙の一部は、書状包紙(ウ八書「人々御中」)を用いて補修。全巻にわたって、書き入れ(本文と同筆か)、白点(春日政治『古訓点の研究』によれば三論宗点系)が見られる。

(杉本一樹)

染織品の整理

平成10年11月の西宝庫定例開封終了後から、翌11年10月の定例開封までの間に整理した染織品は次の通りである。

1 古裂帳

染織小裂片を貼り交ぜた台紙(40×30cm)を20枚綴じ付けて、以下の帖冊として整理した。染織小裂片は、織り方と染色の別に分類して、薄い生麩糊を用いて貼付した。

第887号	赤、紫純類	全336片	中倉202	第80号櫃出櫃
第888号	緑純類	全347片	中倉202	第80号櫃出櫃
第889号	絹純類	全245片	中倉202	第80号櫃出櫃
第890号	絹純類	全293片	中倉202	第80号櫃出櫃
			南倉174	第197号櫃出櫃
			南倉184	第137号櫃出櫃
			南倉185	第130号櫃出櫃
第891号	諸色純類	全531片	中倉202	第80号櫃出櫃
			南倉185	第130号櫃出櫃
第892号	緑純類	全197片	中倉202	第80号櫃出櫃、並びに出櫃号数不明分

2 その他

平成10年の西宝庫定例開封中に、南倉129皂純袍第3号を西宝庫より出蔵して、裂地の保護のために、何重にも折り畳まれていたものを展開して修理したところ、西宝庫内の収納箱に戻すことが出来なくなったので、新たに東宝庫内の籐張函架に収納した。

(尾形充彦・田中陽子)

修 理

1 染織品

平成10年11月の西宝庫定例開封終了後から、翌11年10月の定例開封までの間に次の染織品の修理を行った。

1) 南倉129 白縮袍 第3号 (挿図22・23)

[法量] 丈135cm、幅234cm

[品質形状] 両脇を縫わずに開けて、盤領、筒袖とし、裾に襷を付けない、古式の袍である。両袖口に端袖を付ける。

[修理前の状態]

- ・袍として完存しており、縮の傷みは、外観上ほとんど分からないが、5、6重に折り畳まれて、明治以来小さな収納箱に納められていたので、折目の部分が弱っており、筋切れしそうになっている。
- ・細幅の縮製の襟を本体に縫い付けている糸の多くの部分が切れていて、襟が外れかかっている。
- ・襟以外の縫糸は残っているが、引っ張ったり、折り畳むなどの張力を加えると、切れる恐れがある。

[修理の仕様]

- ・水（イオン交換水）で少し湿り気を与えて、折れや皺を伸展し、これまでの負荷を減らして、筋切れをおこさないようにした。
- ・現状よりも破損が進行することが無いように、襟の綻びを、縫い幅を大きく取って、新糸で縫い止めて、糸の色も変え、修理時の縫製であることが分かるようにした。

[備考]

- ・縮の織り密度は、経糸36～38本/cm、緯糸24～28本/cmである。
- ・正倉院には黒紫縮製の袍が4領あり、『正倉院御物目録』によると、1領は黒紫縮袍、他の3領は白縮袍と名付けられているが、特に白縮袍とした根拠は不明である。

2) 南倉146 幔帳類 第3号 白縮帳 其1 (挿図24・25)

[法量] 縦167cm、横296cm

[品質形状] 1幅の白縮を横に3幅を継いだ一重の裂である。両長側は耳のままで、両短側は縁を約3mm幅で二重に折り曲げて紵縫いしている。

[修理前の状態]

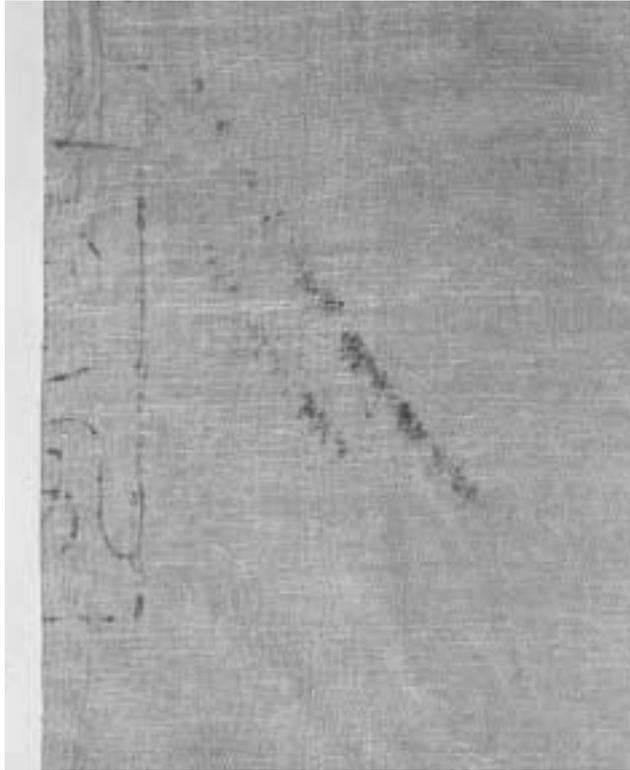
- ・破れ穴や筋切れは無く、ほぼ完存しているが、細かく折り畳まれており、折り目のところが



挿図22 南倉129 皂純袍 第3号 (修理前)



挿図23 南倉129 同上 (修理後)



挿図24 南倉146 幔帳帳類 第3号 白純帳 其1 (讃岐国印部分・原寸大)



挿図25 南倉146 同上 (修理後)

筋切れする恐れがあった。

[修理の仕様]

- ・水（イオン交換水）で少し湿り気を与えて、全体に軽い重しを載せて、十分に折れや皺を伸展した。

[備考]

- ・用いられている一幅の白糸3枚のうち1枚の端には、押捺された讃岐国印の右半分が残っているため、讃岐国調糸であることが知られる。他の2枚の糸も、織り密度や見た目の感じが類似しており、おそらく同じ1匹の反物から裁断された3枚であろう。織り密度は、経糸47～50本/cm、緯糸22～31本/cmである。

（尾形充彦・田中陽子）

2 聖語蔵経巻

平成11年度における聖語蔵経巻の修理は、平成10年秋に出蔵した下記の経巻合わせて30巻について行った。

1) 甲種写経 第51号 大方廣佛華嚴経 巻41・42・43・44・45の5巻

[法量] 本紙の縦27.1～27.2cm、横51.2cm前後。界高20.6cm、界幅1.7～1.8cm。

[品質形状] いずれも卷子装。軸端撥形金銅製。軸は棒軸。

[修理前の状態]

- ・標紙・本紙ともに濃い褐色に染められている。紙質は堅くて脆いため、所々に折れや紙継ぎ部分の糊離れなどが生じ、虫喰い穴もみられた。

[修理の仕様]

- ・紙継ぎ等の糊離れのみられる箇所を糊付けしたり、本紙と似合いのやや厚手の和紙を薄い褐色に染めて虫喰い穴の補填などに用いた。この補紙は、楮紙を阿仙・丹殻などの植物染料で刷毛染めしたものである。

2) 乙種写経 第215号 大般若経 巻426～同巻462までの25巻

[法量] 本紙の縦27.0～27.6cm、横46.5cm前後。界高20.2cm前後、界幅1.8cm前後。

[品質形状] いずれも卷子装。軸端撥形木製。軸は割軸。

[修理前の状態]

- ・いずれも表紙は縹色で、本紙は白紙である。
- ・経巻によって多い少ないはあったが、全体に虫喰い穴や破れがみられた。標紙、標題、発装あるいは軸などを失なうものがあった。また表面には、虫糞などの汚れの付着もみられた。
- ・巻207中に分離片が2片巻き込まれていた。

[修理の仕様]

- ・表面に付着した虫糞などの汚れを取り除いた。
- ・虫喰い穴や破れの箇所は、破れの大きさに合わせた薄和紙を裏から薄糊で貼付して補修した。標紙については、楮紙を藍などの植物染料で染めたものを補った。標題や発装および軸などの欠失したものについては、似合いのものを新規作成して補った。
- ・巻207中の分離片に関して、1片は本来の箇所が確認できたのでこれを補って修理し、もう1片に関しては所属が明らかにできなかったため、元の状態のまま別に添付しておいた。

(尾形充彦・田中陽子)

3 伎楽面

平成11年度(第1次10箇年計画第7年度)の対象面と修理概要は次のとおりである。

1) 南倉1 伎楽面 木彫 第113号(挿図26~31)

[法量] 縦25.4cm、横19.0cm。

[品質形状] 桐材、彩色。太孤児面。(詳細は調査の項参照)

[修理前の状態]

- ・全面に埃が付着する。
- ・汚れや黴痕と思われる染みが見られる。
- ・彩色部は絵具層が剥離剥落し、粉状化している。
- ・虫損等による木地劣化が著しく、木地の表面一層を残し下層が海綿状になった部分あり。

[修理仕様]

- ・付着した埃は彩色を損傷しない程度において、可能な限り除去した。
- ・汚れや染みはイオン交換水を用いて除去した。
- ・絵具層と木地との隙間に布海苔と膠の混合液を差し込み、剥離剥落止めを行った。
- ・外面の木地が露出した箇所および内面には布海苔の水溶液およびアクリルとシリコンを共重合させた樹脂(ロイシール6260)を浸透させて、強化を計った。
- ・虫穴等木地が空洞化した箇所にはアクリル樹脂エマルジョン(プライマルASE60のアンモニア中和溶液)、アクリルとシリコンの共重合樹脂(ロイシール6260)、無水珪酸微粉末(エロジール)、塩化ビニリデン樹脂マイクロバルーン(エクспанセル)、それに周辺の色と調和を計るためのアクリル絵具を混合した樹脂木屎を注入し強化を計った。

[施工者] 岡墨光堂(彩色剥落止め)、北村謙一(木地関係)

2) 南倉1 伎楽面 乾漆 第7号(挿図32~41)

[法量] 縦24.5cm、横18.7cm。

[品質形状] 乾漆、彩色。太孤児面。(詳細は調査の項参照)



挿図26 南倉1 伎楽面 木彫 第113号 正面（修理後）



挿図27 同左 背面（修理後）



挿図28 同上 右側面（修理後）



挿図29 同左 左側面（修理後）



挿図30 南倉1 伎楽面 木彫 第113号 下面(修理後)



挿図31 同左 上面(修理後)



挿図32 南倉1 伎楽面 乾漆 第7号 正面(修理後)



挿図33 同左 背面(修理後)



插图34 南倉1 伎楽面 乾漆 第7号 右側面(修理後)



插图35 同左 左側面(修理後)



插图36 同上 下面(修理後)



插图37 同左 上面(修理後)



挿図38 南倉1 伎楽面 乾漆 第7号 背面 左斜め
(修理前)



挿図39 同左 背面 左斜め (修理後)



挿図40 同上 背面 右斜め (修理前)



挿図41 同左 背面 右斜め (修理後)

[修理前の状態]

- ・全面に埃が付着し、とくに目、鼻、口の周辺に多く付着する。
- ・絵具層はほとんど剥落し、わずかに残った絵具層も乾漆素地より浮き、剥離寸前である。
- ・乾漆素地が劣化し、穴があいたり、木屎が剥落して麻布が露出した箇所があり、全体的に干割れが生じている。
- ・乾漆素地の左耳から顎にかけてと後頭部左側小口が変形している。
- ・頭頂部に貼毛があるが、接着力が弱り、剥落しそうになっている。

[修理仕様]

- ・付着した埃は可能な限り除去した。
- ・絵具層は布海苔と膠の混合液を差し込み、剥離剥落止めを行った。
- ・外面及び内面の乾漆素地は表面に布海苔の水溶液を塗布し、強化を計った。
- ・乾漆素地の劣化箇所のうち麻布の剥離した箇所には麻布各層ごとに麦漆を差し込み貼り合わせた。
- ・乾漆素地に生じた干割れや穴には麦漆あるいは漆木屎を充填し、乾固後に充填物の表面を研磨し、周辺の色調と調和させた。
- ・乾漆素地の変形箇所は加湿して柔軟性を持たせ修整した。
- ・頭頂部の接着力が弱った貼り毛は、麦漆あるいは漆木屎で接着、補強した。

[施工者] 岡墨光堂（彩色剥落止め）、北村謙一（木地関係）

（西川明彦・三宅久雄）

模 造

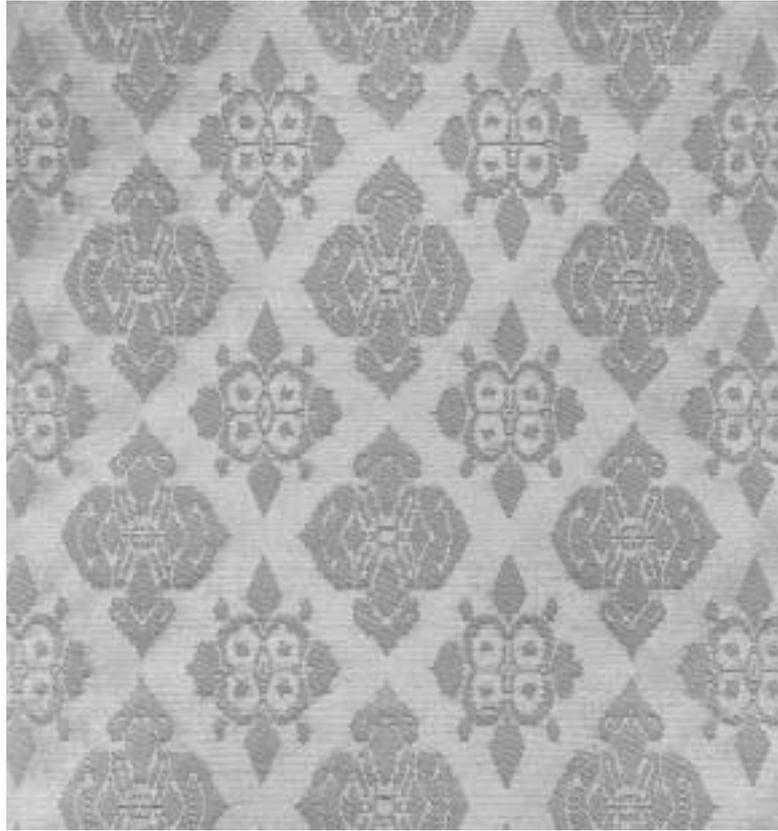
平成11年度は、北倉48木画紫檀挟軾付属褥の表面に用いられている小唐花文白綾と南倉70黄金瑠璃鈿背十二稜鏡の2件を対象として実施した。

1 白 綾（挿図42・43）

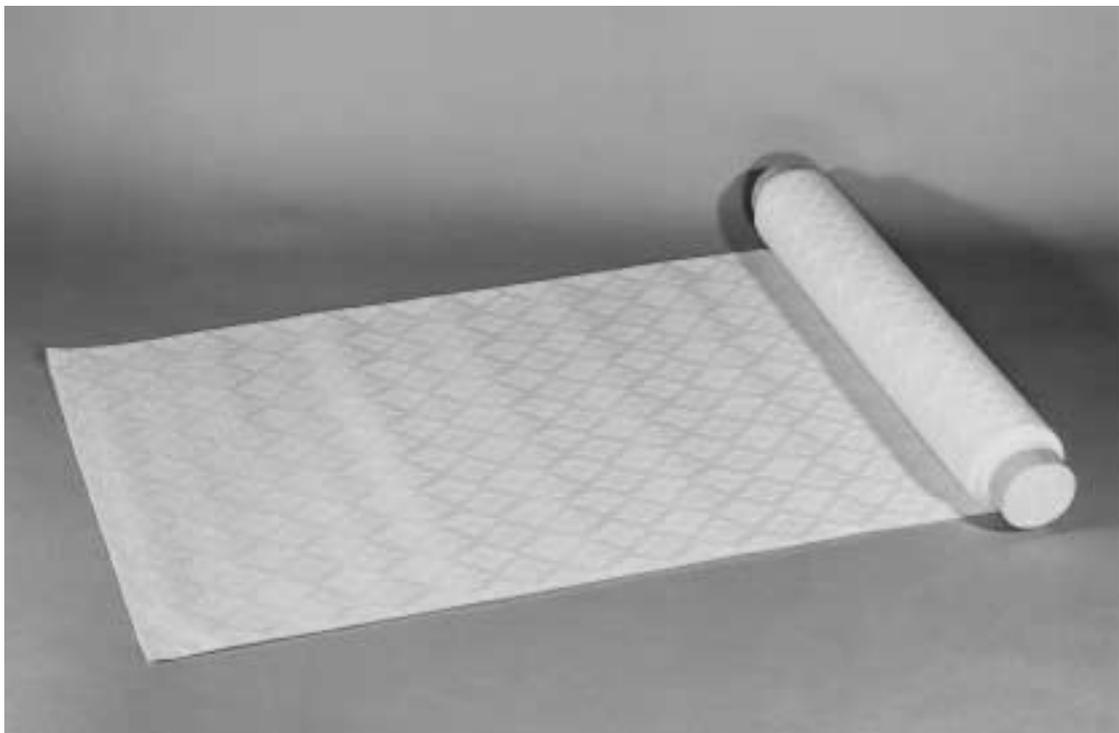
平成6年度より、10カ年計画のもとに、皇居内の御養蚕所より小石丸の繭の譲渡を受けて、奈良時代の絹織物の復元模造を開始した。小石丸の繭は、現在、奈良時代の絹織物を復元模造するのに最も望ましいといわれている。6年目にあたる本年は、白綾の復元模造を行った。

正倉院には、綾が100種類以上存在する。その中で、今回復元模造の対象とした綾によく似た文様のものが、北倉46白練綾大枕にも使用されている。どちらも国家珍宝帳所載の聖武天皇の身近にあったもので、奈良時代の綾の優作の一つと思われる。

従来、それらは同じ綾で、経年変化の仕方が異なるために、一見すると文様が少々異なって



挿図42 小唐花文白綾 模造品 部分 (×0.5)



挿図43 同上 全姿

見えるだけだと考えられてきたが、今回詳細な調査を行ったところ、経糸の本数、緯糸密度、文様の細部の形状など多くが異なっており、あまり共通点が無いことがわかった。

織機は、手織り式の高機にジャカード機を載せて使用した。今回使用した高機は、上にジャカード機を載せやすいように開発されたとされる、いわゆる厩機である。

古代に正倉院の綾がどの様な織機で織られたのか、今日でもまだ解明されていない。したがって、文様のいびつな形状や織り違いが、製織工程のどの段階の何が原因で起こったものか不明である。そのような中で、現代の織機と技法を用いて、宝物に生じている種々のゆがみや傷をも復元するためには、様々な事柄を推定して、試行してみる以外なかった。たとえば、緯打ちには、箆の前に刀杼（刀状の緯打具）を置いて行ったことで、良好な結果を得た。

製糸は、糸に強い延伸力が加わらないように、運転速度を通常の半分近くまで落として、自動製糸機でケンネル撚りを掛けて製糸した。そして、それらの丸い抱合性の良い生糸を合わせて、経・緯糸とした。なぜなら、ジャカード機で文様を表すために通糸を頻繁に、しかも不規則に上下させ、さらに地機で再び経糸を上下させると、経糸があちこちで繰り返し擦れ合い、平みのある絹糸を用いたのでは経糸が切断する可能性があると考えたからである。また、糸の滑りを良くするために、生糸を良く水洗したが、観察結果から今回は精練を行わなかった。

今回の復元模造では、文様の形状の不規則な変化が一番問題であった。限られた大きさの実物資料しか伝存していないので、実物をそのまま縦横に並べて繰り返したような作り方をすると、単調な繰り返しパターンが目立ってしまう恐れがあった。例えば、文様組織の織り目が真っ直ぐに通っていたら縦筋が出来る。そのため、文様の傷に当たる部分を、所々ランダムに織り出すようにして、文様全体の雰囲気バランス良くあらわされるように工夫した。

[模造対象宝物] 小唐花文白綾（北倉48 木画紫檀挟軾 付属褥）

[法量] 文丈、窠間幅は不明。経糸方向に約44cm（主文副文の6回繰り返し分）で1単位とみなして製織した。幅約56.4cm、長さ8mを織成。

[仕様] 経糸の太さは85、100、120デニールのものをほぼ同じ本数ずつ不規則に並べて、50、150デニールのを各々10本ずつ加えた。密度は平均48本/cmとした。緯糸の太さは、245デニールとした。密度は平均21本/cmとした。

地綜統は、棒綜統を12枚とし、文綜統は、600口のジャカード機に取り付けた（5712本の経糸をジャカード機に取り付け、2本1組の羽二重で経糸を開口したので、綾の経糸本数は2856本であるが600口のジャカード機を使用した）。

製織は、文様を図面に描き起こして、織り把釣りによる文の縁の凸凹した線をどのように描くか、実際の形や雰囲気を壊さないように十分に検討した上で、ジャカード装置を用いて経糸を開口し、開口する毎に、緯糸1本1本を手織りした。

織組織は、綾地異方綾文綾（地組織と文組織の斜文線の方向が異なるもの）。褥の表面の地組織は緯斜文（緯糸が多く見えている）の四枚綾、文様部分は経斜文（経糸が多く見えている）の四枚綾である。正倉院の綾地異方綾文綾は、この褥とは反対面（地組織が経斜文で文様部分

が緯斜文の面)を表として用いているのが一般的と思われ、これは例外的である。

[製作者] 株式会社川島織物

(尾形充彦・田中陽子)

2 黄金瑠璃鈿背十二稜鏡 (挿図44・45)

[模造対象宝物] 南倉70 黄金瑠璃鈿背十二稜鏡 第6号

正倉院宝物中唯一の七宝製品。また、正倉院に伝わる56面の鏡のうち、唯一の銀製鏡胎。

銀の厚い板を轆轤で挽いたのち、裁断して十二稜形の鏡胎を作り、背面側に七宝焼きの花卉を漆様物質で貼り、鈕を花芯に見立てた宝相華を表す。

鏡背の花卉は大花卉6枚、覗き花卉6枚、鈕周縁の小花卉6枚をそれぞれ別に作る。まず、薄い銀板を各花卉形に切って、縁を折り曲げて立ち上りを作り、その内部上面に銀の帯状薄板で文様区(植線)をつける。そして、各文様区内に黄褐・緑・濃緑の七宝釉薬を焼き付け、銀製の花卉形および植線に鍍金を施す。なお、大花卉と覗き花卉の先端の隙間には霞文を打ち出した三角形の金板12枚を貼る。

鈕は花卉と同じように銀板に七宝釉薬を施したものを作り、鏡胎に取り付けているが、その方法については不明である。また、鏡側面に銀製鍍金の帯が約2mm幅で十二稜形に沿って巡っているが、その構造および加工方法についても具体的には判っていない。

そこで、今回の模造に際し、この不明箇所について、さまざまな調査を実施したが、構造を裏付ける確証が得られなかった。しかし、鏡として使用する際に鈕の強度が要求されることと、側面の帯を鈕と別製とした場合、帯の厚さが薄いものでは鏡胎に密着させることが極めて困難であることを考え合わせ、鈕と側面の帯が一体のものと推測し、製作に至った。つまり、1枚の銀板を打ち出して、鈕の箇所を中空の半球形にし、その裾を十二稜の鏡胎外縁にまで広げた、十二稜形の広いつばをもつ、麦藁帽子状の銀板を作り、鈕部分に七宝を、つばの縁に鍍金を施し、つばの上面から鉚を打って鏡胎に止め、最後に前記の花卉や金板をこのつばの上に漆木屎で接着した。

なお、模造対象宝物の構造等については調査の項に譲る。

[模造品の製作材料]

銀板各種(鏡胎・七宝胎・界線)

七宝釉薬(濃緑色・緑色・黄褐色)

金板(鏡背霞文飾り板)

金粉(鍍金用)

木屎漆(黄楊木粉、米糊、小麦粉、漆の混合物で七宝板貼付用)



挿図44 黄金瑠璃鈿背十二稜鏡 模造品

[法量]

長径18.5cm、短径17.3cm、縁厚1.4cm、鈕高1.1cm、重さ2229g（宝物は2177g）

[製作工程]

①鏡胎製作

鏡胎は厚さ1cm強の分厚い銀板を轆轤挽きして、鈕が覆う中心部を断面台形の凸状に残し、周縁部のせり上った円板を作る。そののち周縁を切り落として原宝物の形状と同じ十二稜形に成形する。

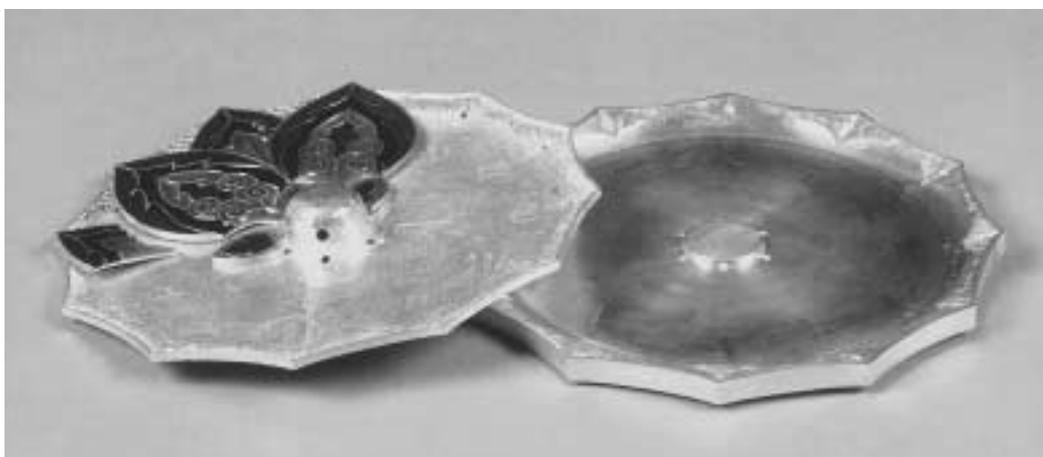
②型紙製作

花卉形など鏡背の七宝板の形状に合わせて、型紙を作った。

③花卉形七宝胎の台の製作

型紙に合わせながら木製の台を作るが、七宝の焼成によって変形するのを考慮した形状とした。

④花卉形の七宝胎の製作



挿図45 同上 製作途中

花卉形は鈕周縁の小花弁6枚、大花弁6枚、覗き花弁6枚を以下のようにそれぞれ別にする。まず、厚さ1mmの薄い銀板を各花卉形に切って、木製台に置いて鍛造した。そして、縁を折り曲げて高さ3mmの立ち上りを作り、その内部上面に銀の帯状薄板で文様区（植線）を白及糊で付けた。なお、通常七宝は裏引きといい、施釉の際に金属と釉薬の膨張率の均整をはかり、七宝胎の変形を防ぐために裏面にも釉薬を施す。しかし、原宝物に裏引きはなく、模造についても裏引きを施さず、花卉の反りは原宝物の現状より極端に大きく反らせておき、最終的に原宝物の反りに合うようにした。

⑤鈕の七宝胎の製作

厚さ3mmの1枚の銀板を打ち出して、鈕の箇所を中空の半球形にし、その裾を十二稜の鏡胎外縁にまで広げた、十二稜形の広い鍔をもつ、麦藁帽子状の銀板を作った。そして、鈕部分のみ花卉形と同様に植線を付けた。

⑥七宝釉薬の調製

花卉形および鈕の各文様区内に黄・緑・濃緑の七宝釉薬を焼き付けた。七宝釉薬は珪砂と鉛丹を混合した基礎釉に、銅を加えた緑色釉と濃緑色釉、また鉄を加えた黄色釉のフリット（ガラスの粉）を作製した。

なお、原宝物の黄色釉は基礎釉が未溶解のまま不透明なものがあるが、それと同様になるように釉薬を調成した。

⑦施釉

七宝胎の各区内にそれぞれ黄色、緑色、濃緑色の釉薬を置き、加熱して焼き付けた。なお、釉薬の厚みが宝物同様になるように、6回に分けて施釉を行った。また、焼成は釉薬表面に細かい嵌入が入るように、裏引きを施さないで行った。

⑧鍍金

花卉形の縁と植線、それと十二稜形麦藁帽子状銀板の縁と鈕部分の植線に電気鍍金を施した。

⑨霰文金板作製

厚さ0.5mmの1枚の金板に裏から石目鑿で粒を打ち出し、表から魚々子鑿で打って粒の裾を絞める。それを切断して12枚の三角形板を製作した。

⑩鏡胎と十二稜形麦藁帽子状銀板の接合

十二稜形麦藁帽子状銀板の上面から鈕周辺5箇所と周縁12箇所に銀製の棒を打ち込み接合した（挿図45）。

⑪鏡背飾りの接合

花卉形および霰文金板はそれぞれ十二稜形麦藁帽子状銀板の上に、空間部を麻布で調整しながら、木屎漆（黄楊木粉、米糊、小麦粉、漆の混合物）を充填して接着した。

[製作者]

七宝作家 田中輝和（日本工芸会正会員、社団法人日本七宝作家協会会長）

（西川明彦・三宅久雄）

正倉院展公開講座

平成11年度正倉院展の公開講座は、当所からは木村法光が出講し、11月6日「正倉院の漆工 - 展観品を中心に - 」と題して講演を行った。講演内容の概要は以下の通りである。

正倉院宝物中には、多くの奈良時代の漆工品が伝えられている。古代の漆工技法は、これら正倉院宝物によってはじめてその全貌が明らかにされたと言ってしまう過言ではない。その漆工技法を大別分類すると、塗りの技法として「黒漆塗」「赤漆塗」があり、その表面を飾る加飾法として「平脱」「平文」「密陀絵」「螺鈿」「金銀絵」「伏彩色」「末金鏤」等多種多彩である。ただ今回の展観には、正倉院にただ1点しか残されていない末金鏤（「金銀鈿莊唐大刀」）こそ出陳されなかったが、それ以外のほとんどの技法に亘る漆工品が少なからず出た。従って話を幾つかのジャンルに限定するよりも、今回ほど正倉院の漆工芸全般について語る好機はないということもあって、正倉院の漆工につき詳しく解説をした。またこれまで解釈の分かれていた技法についても私見を交え解説を加えた。

まず、正倉院文書に記載された内容から素地を整える基礎作業として刻苧餉（木屎）、布着せ（塼、即、則）、漆錆（土漆）が施され、中塗り・上塗りには掃墨（松煙などの煤）を混ぜた黒漆塗りのほか、素地を蘇芳などで染め生漆を塗る赤漆、いわゆる現代の春慶塗の一種が盛んに行われたことを見た。他に仕上げ用の花塗や漆を漉して用いたことを意味する絞漆、その他陰漆、鹿毛漆、焼漆など漆工に関する特殊用語についても解説を試みた。

続いて素地の種類について、その用いられ方の傾向から、やはり木製素地が圧倒的に多いこと、今は廃れてしまった皮製漆工品である「漆皮」は、当時大切なものの入れ物に利用されていたこと、現代には伝えられていない素晴らしい漆器素地「巻胎」が、正倉院宝物に11点も完全な姿で残されていることなどをみた。

最後に正倉院の漆工品の加飾法のうち、明治以来今日に至るまで長年議論の対象となってきた平脱、平文について詳しい解説をした。

奈良時代における平脱、平文は共に金銀の薄板を文様に切って漆地に貼り器物を飾る技法であるが、平脱の場合は塗り込められた文様を出すのに、文様上の漆塗膜だけを籠用のものではぎ取るものである。従って文様以外の漆地は漆を塗ったままの今日言う塗り立て仕上げのものを言う。一方、平文の場合は、塗り込められた漆塗膜を除去するのに、文様の部分もそれ以外の地の部分も区別なく炭やその他の研磨材で研磨し、文様を研ぎ出し、そのために生じた細かい傷に胴摺りや摺漆を施し、更に器物全体に磨きをかける工程を経た今日言う蠟色仕上げのもので、平脱とはその行程と仕上がり上の微細な点が異なっていることを解説した。

（木村法光）

秋季定例御開封

平成11年度の西宝庫秋季定例御開封事業は、10月1日の御開封から12月14日の御閉封まで、75日間にわたって行われた。御開封には勅使北尾美成侍従が櫻山和民正倉院事務所長の先導により西宝庫内を巡視、角田素文書陵部長がこれに従った。また上司永慶東大寺別当、内田弘保奈良国立博物館長、斎藤誠治京都事務所長、湯川博正畝傍陵墓監区事務所長、生田瑞穂皇宮警察本部京都護衛署長らの参列を得た。

御閉封には、勅使目黒勝介侍従が櫻山和民所長の先導により西宝庫内を巡検、北啓太編修課長がこれに従った。また上司永慶東大寺別当、内田弘保奈良国立博物館長、斎藤誠治京都事務所長、湯川博正畝傍陵墓監区事務所長、生田瑞穂皇宮警察本部京都護衛署長の参列を得た。

なお、東宝庫聖語蔵経巻収納戸棚の宮内庁長官封は、当分の間正倉院事務所長封を以て施す。

開封期間中には、宝物、経巻の点検と防虫剤入替、日本刀剣保存会幹事吉川永一氏による刀剣手入れ、宝物・経巻の台帳写真撮影、空調機械・計器の点検などの保存関係業務、宝物・経巻の調査、出陳関係の業務のほかに、次の調査、撮影などが行われた。

まず、部外の専門家に委嘱して行う宝物調査を1件実施した。調査は、宝物中の木漆工品を対象としてその年輪年代調査を行うもので、本年は2ヵ年計画の2年目である。調査対象宝物は、2頁の表1の通り北倉の棚厨子以下41件であった。調査員は奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室長・光谷拓実、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所・工楽善通、京都大学木質科学研究所教授・伊東隆夫、工芸家・坂本茂作の4氏に委嘱、実施した。調査期間は10月18日から10月22日までの5日間と、補足調査として平成11年5月26日、28日、31日、6月21日、23日、7月1日の6日間の合計11日間であった。

また、宝物模造事前調査は、南倉30黄銅合子と南倉47佐波理加盤について行った。調査は日本工芸会正会員般若昭三、伝統工芸士浦島俊秀の両氏に依頼し実施した。調査期間は11月2日、4日、5日の3日間であった。他に染織品の経錦について株式会社川島織物の高野、森ほか5氏に依頼し、11月9日から11日までの3日間実施した。

次に出願による文書・経巻の調査・撮影は、東京大学史料編纂所長出願の正倉院古文書調査が5日間、東大寺図書館長出願の聖語蔵経巻調査が3日間、国立歴史民俗博物館出願の正倉院古文書複製のための撮影が5日間、それぞれ行われた。

宝物の出陳は、恒例の奈良国立博物館での「正倉院展」で、75件の宝物・経巻を出陳した。期間は10月25日を招待日とし、一般公開は10月26日から11月14日までの20日間とした。今回は天皇陛下御即位十年の御慶事に鑑みて平常17日間の会期を延長し、また即位礼正殿の儀が行われた11月12日を会期に含むこととした。一般公開中の観覧者は149,915人であった。出陳品目は後掲の別表2の通りである。

また、正倉外構の一般公開にともなう観覧者総数は、平成11年4月1日から平成12年3月31日までの1年間に141,793人であった。 (三宅久雄)

表2 平成11年度「正倉院展」出陳宝物

区分	番号	品目	数量	備考	区分	番号	品目	数量	備考
北倉	1	九條刺納樹皮色袈裟 第1号	1領		中倉	88	紺玉帯残余	1条	
"	12	大魚骨笏	1枚		"	88	螺鈿箱	1合	
"	20	玉尺八	1管		"	131	斑犀把漆鞘銀漆荘刀子 第2号	1口	
"	26	金銀平文琴	1張		"	131	棒纏把鞘白銀玉虫荘刀子 第4号	1雙	
"	42	円鏡 第2号	1面	鳥花背、付 緋純帯・題箋	"	131	斑犀把金銀鞘刀子 第9号	1雙	
"	42	八角椀匣	1合	第2号鏡付属	"	131	烏犀把漆鞘棒纏黄金珠玉荘刀子 第11号	1口	
"	42	円鏡 第10号	1面	平螺鈿背、付 緋純帯	"	143	密陀彩繪箱 第13号	1合	付 金銅鏤子
"	42	漆皮箱	1合	第10号鏡付属	"	149	金繪木理箱 第22号	1合	実は金銀繪
"	42	八角鏡 第12号	1面	漆背金銀平脱	"	152	蘇芳地金銀繪箱 第27号	1合	
"	44	鳥毛立女屏風	6扇		"	163	柿厨子	1口	
"	46	白練綾大枕	1枚		"	177	粉地金銀繪八角長几 第6号	1枚	
"	49	御床 第2号	1張		"	177	仮作黒柿長方几 第16号	1枚	
"	49	御床覆	1条		"	202	御床豊残余	1括	第119号櫃のうち
"	154	銀平脱合子	1合		南倉	14	銀盤 第1号	1枚	
"	154	白絃	1口	付 木牌	"	18	金銀花盤	1枚	
"	154	斑絃	1口	付 木牌	"	21	金銅六曲花形坏	1口	
"	154	中小絃	1口	付 木牌	"	22	金銅小盤	1枚	
"	154	箏絃	1口	付 木牌	"	25	佐波理水瓶 第1号	1口	人面口
"	165	齊衡三年六月二十五日 雜財物実録	1卷		"	40	漆彩繪花形皿 第2号	1枚	
"	182	縹地大唐花文錦 第18号 緑地霰花文錦 第43号	2片	東大寺屏風1畳の内	"	43	金銀匙	1枚	
"	182	緑地目交縹纈 第49号 樹下鳳凰双羊文白綾 第68号	2片	東大寺屏風1畳の内	"	66	袖御礼履 赤漆履箱	1両 1合	
中倉	14	東大寺開田地図	1張	越中国射水郡根田野 地図	"	70	円鏡 第9号	1面	鳥獸花背、付 緒
"	14	殿堂平面圖	1張		"	71	金銀繪鏡箱	1合	
"	14	東南院古文書 第3櫃第29卷	1卷	越中国司解(神護景 雲1)	"	82	縹縷 第1号	1条	開眼縷、付 紙箋
"	15	正倉院古文書正集 第17卷	1卷	駿河国正税帳 (天平9・10)	"	86	金銀簪	1雙	
"	15	正倉院古文書正集 第23卷	1卷	御野国本篋郡栗栖太 里戸籍(大宝2)	"	97	白椽純袷裳 第3号	1腰	
"	16	続修正倉院古文書 第43卷	1卷	造東大寺司画師召文 (天平宝字2)ほか	"	103	琵琶袋残余	1括	錦6片・白氈芯各3 片
"	17	続修正倉院古文書後集 第37卷	1卷	写経勘出注文	"	109	笙 第1号	1口	呉竹
"	17	続修正倉院古文書後集 第43卷	1卷	買新羅物解(天平勝 宝4)	"	111	横笛 第2号	1管	斑竹
"	18	続修正倉院古文書別集 第48卷	1卷	鏡背下絵・大論戲 画ほか	"	118	茶臈纈半臂 第3号	1領	大歌4物のうち
"	34	梵網經	1卷		"	129	黄布袍 第22号	1領	
"	34	檀金銀繪経筒	1合		"	150	白椽綾錦几褥 第30号	1張	
"	35	天平宝物筆	1枝		"	150	白椽地亀甲錦褥残余 第51号	1張	御床褥
"	36	天平宝物墨	1挺		"	162	金銅雲花形裁文	1枚	
					"	163	金銅鳳形裁文	1枚	
					"	170	赤漆櫃 第1号	1合	密陀繪雲兔形
					"	181	吉字刺繡飾方形天蓋残余 第7号	1張	
					"	185	花喰鳥刺繡残余	1片	第128号櫃 雜31号
					聖語藏	2 10	摩訶般若波羅蜜經 卷29	1卷	
					"	3 82	大宝積經 卷15	1卷	
					"	4 72	央掘魔羅經 卷2	1卷	

天皇陛下御即位十年記念特別展
「よみがえる正倉院宝物 再現された天平の技」の開催

正倉院宝物の模造品は明治時代に入って本格的な制作が行われるようになった。また正倉院事務所では昭和47年以来、継続して復元模造事業を実施し現在に至っている。天皇陛下の御即位10年を記念し、東京国立博物館と奈良国立博物館の協力を得て、同館及び正倉院事務所保管の模造品と、そこに再現された古代の技術とを紹介するため、宮内庁、朝日新聞社と各開催館との共催により、下記のとおり、展覧会を催した。総展示件数は72件、うち正倉院事務所出品は螺鈿槽箆以下44件であった。

- 1 会 場 兵庫県立歴史博物館
期 間 平成11年4月24日～6月6日(38日間)
入場者数 2万8169人(招待日含む)
主 催 宮内庁、兵庫県立歴史博物館、朝日新聞社
後 援 社団法人日本工芸会、兵庫県、兵庫県教育委員会、朝日放送
協 賛 日本通運株式会社

- 2 会 場 高岡市美術館
期 間 平成11年7月29日～8月29日(28日間)
入場者数 1万3802人
主 催 宮内庁、高岡市美術館、朝日新聞社
後 援 社団法人日本工芸会、富山県、高岡市、高岡市教育委員会、北日本放送、富山テレビ放送、チューリップテレビ
協 賛 日本通運株式会社

- 3 会 場 福岡県立美術館
期 間 平成12年1月8日～2月13日(32日間)
入場者数 3万2186人
主 催 宮内庁・福岡県立美術館・朝日新聞社
後 援 社団法人日本工芸会、福岡県、福岡県教育委員会、福岡市、福岡市教育委員会、九州朝日放送、西日本鉄道株式会社
協 賛 日本通運株式会社、九州電力株式会社

(三宅久雄)

表3 「よみがえる正倉院宝物」展出品一覧

模造品名	員数	所蔵者	模造品名	員数	所蔵者
袈裟箱袋	1口	正倉院事務所	紺玉帯	1条	正倉院事務所
袈裟箱	1合	正倉院事務所	螺鈿箱	1合	正倉院事務所
緑牙撥鏤把鞘金銅莊刀子	1口	奈良国立博物館	螺鈿箱囃	1口	正倉院事務所
黒漆三合鞘刀子	1口	奈良国立博物館	雑帯	5条	正倉院事務所
紅牙撥鏤尺	1枚	正倉院事務所	紫檀木画箱	1合	正倉院事務所
銀平脱合子	1合	正倉院事務所	蘇芳地金銀絵箱	1合	正倉院事務所
金銀平文琴	1張	東京国立博物館	緑地彩絵箱	1合	東京国立博物館
紅牙撥鏤撥	1枚	正倉院事務所	白檀八角箱	1合	正倉院事務所
螺鈿紫檀五絃琵琶	1面	東京国立博物館	黒柿両面厨子	1基	奈良国立博物館
螺鈿紫檀阮咸	1面	東京国立博物館	漆挟軾	1基	正倉院事務所
木画紫檀双六局	1基	奈良国立博物館	粉地彩絵八角几	1枚	正倉院事務所
金銀鈿莊唐大刀	1口	正倉院事務所	六ヶ国調白純	6点	正倉院事務所
呉竹鞘御杖刀(刀身)	1口	正倉院事務所	羅(小菱格子文白羅、子持並三菱文白羅)	2帖	正倉院事務所
金銀平脱八角鏡	1面	東京国立博物館	伎楽人形(呉公・呉女・迦楼羅)	3組	奈良国立博物館
花鳥背八角鏡	1面	正倉院事務所	金銅大合子	1合	東京国立博物館
白葛胡祿	1口	正倉院事務所	漆彩絵花形皿	1枚	正倉院事務所
漆葛胡祿	1口	正倉院事務所	銀平脱鏡箱	1合	東京国立博物館
赤漆葛胡祿	1口	正倉院事務所	螺鈿槽箏篋	1張	正倉院事務所
箭	15本	正倉院事務所	漆槽箏篋	1張	正倉院事務所
金銅莊大刀	1口	正倉院事務所	二彩鉢	1口	正倉院事務所
黒作大刀(刀身)	1口	正倉院事務所	琵琶袋	1口	正倉院事務所
黒作大刀(外装)	1口	正倉院事務所	甘竹簾	1口	正倉院事務所
天平六年尾張国正税帳 (正倉院古文書 正集 第15卷)	1巻	正倉院事務所	磁鼓	1口	正倉院事務所
播磨国郡稻帳 (正倉院古文書 正集 第35卷)	1巻	正倉院事務所	破陣楽大刀	1口	正倉院事務所
筑後国正税帳 (正倉院古文書 正集 第43卷)	1巻	正倉院事務所	染色羅(小菱格子文黄羅、入子菱格子文赤茶羅)	2帖	正倉院事務所
大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍 (続修正倉院古文書 第3巻)	1巻	正倉院事務所	三ヶ国染色純	3点	正倉院事務所
天平宝物筆	1本	正倉院事務所	讃岐国調白純	1匹	正倉院事務所
青斑石轡合子	1合	正倉院事務所	白橡綾錦几褥	1張	正倉院事務所
			紫檀金銀絵書几	1基	奈良国立博物館
			校倉模型	1基	奈良国立博物館

保存環境調査

(1) 金属板腐食試料調査

本調査は東西両宝庫内の空気調和の効果を確認するためのものであり、神戸大学藤居義和助教授に委嘱して行った。

調査は平成10年11月から平成11年10月の約10ヶ月にわたるもので、所定の六箇所（西宝庫中倉一階、同前室、西機械室還気ダクト、東宝庫北室二階、同前室、東機械室還気ダクト）にそれぞれ銀、銅、鉄の板状試料と、銀、銅の蒸着膜試料を配置して、大気に曝露させ、反射率の測定、腐食生成物の膜厚測定（偏光解析法による）、腐食生成物の同定（電子線回折法による）などを実施した。

金属板の反射率の低下が小さく、腐食生成物膜厚が薄い状態が望ましい保存環境といえよう。

西宝庫は中倉一階、前室とも、銅については最も良い保存状態を示したが、銀、鉄については下位に位置している。従来は庫内各所で銀、銅、鉄ともその保存環境上の優劣の順番はほぼ同様であったが、最近は金属の種類によって異なった順番を示す。これらのことは保存環境が以前と微妙に変化したことをうかがわせる。また腐食生成物は銅については Cu_2O が検出され、以前と同様であるが、銀については例年検出されていた Ag_2S （argentite）は検出されず、代わりに Ag_2O および Ag_2O が検出されている。

しかしながら宝庫全体としては引き続き良好な環境を維持していることを確認した。

(2) 二酸化鉛法によるイオウ酸化物汚染度の調査

本調査は正倉院宝庫内のイオウ酸化物濃度を定量的に把握するための調査である。二酸化鉛円筒試料を西宝庫中倉一階戸棚内と同戸棚外および同前室に各1本ずつ平成10年11月から平成11年10月にかけて配置曝露し、回収後定法に従い定量した。

西宝庫内の汚染度は 0.001 ($\text{mgSO}_3 / \text{day} / 100\text{cm}^2 \text{PbO}_2$) 以下と清浄であった。

(成瀬正和)

『図説正倉院薬物』の出版

正倉院事務所では材質調査として平成6年度および平成7年度に薬物第二次調査を行った。調査員は東京大学名誉教授・柴田承二、京都大学名誉教授・木島正夫、岐阜薬科大学学長・水野瑞夫、富山医科薬科大学教授・難波恒雄、千葉大学教授・相見則郎、明治薬科大学教授・奥山徹、大阪大学助教授・米田該典の各氏であった。その調査成果の概要は平成10年3月発行の正倉院紀要第20号に柴田承二氏が調査員各氏の成果をとりまとめて、「正倉院薬物第二次調査報告」と題し報告した。

『図説正倉院薬物』は薬物第二次調査の成果と正倉院薬物の全貌とを一般の人々にもわかり

やすく伝えるという趣旨で、正倉院事務所が編集、柴田承二氏監修で中央公論新社より平成12年2月20日に刊行したものである。薬物の紹介には全点カラー図版を用い、調査員の各氏による論考や個別解説に、調査当時の正倉院事務所長米田雄介氏（現広島女子大学教授）と所内研究職員による論考などを加えた内容である。

（成瀬正和）

宮内庁正倉院事務所職員録（平成13年3月現在）

所長	事務官	櫻山和民
庶務課		
	課長 事務官	安田 勉
庶務係	係長 事務官	中西時夫
	（兼）同	中田浩右
	（同）技官	中西昭彦
	（同）同	荒川 歩
	作業補助員	井元豊子
会計係	係長 事務官	津田勝博
	同	中田浩右
保存課		
	課長 技官	三宅久雄
整理室	室長 技官	尾形充彦
	同	田中陽子
	同	好地 伸
	（修補師長補）	
	同	吉松茂信
	（修補師）	
	同	福森 弘
	同	長尾光也
	専門職 技官	山中五郎
調査室	室長 技官	杉本一樹
	同	西川明彦
	同	飯田剛彦
	（兼）同	奥 善行
	事務補佐員	稲垣幸江
保存科学室	室長 技官	成瀬正和
	宝物調査員	米田雄介